

「50年前の旅日記を読む」 2夜

2夜のはじまりは、まず振り返りから。



小岩：旅行をしていて国境はどんな感じだったのか？

高橋：国によって違った。ヨーロッパはスムーズだったがイランからアフガニスタンに入る時は一晩かかり、街に向かう乗り物が少なく待つことになる。

小岩：これからアフリカに行くぞという感じですが、アフリカの印象は。

高橋：風土は乾燥、回教徒、ターバン、女性の服装も違う。ラクダ、ロバ、風景が全然違う。ヨーロッパではお客さんだったが、アフリカでは立場が逆転する。物乞い。子どもたちが働き手で、日中、学校に行っていない。バスなんかは普通のバスでは無い。買い出しの荷物が押し込まれてすごい事になる。非常に精神的に疲れることになる。

北アフリカへ（モロッコ、アルジェリア、チュニジア）



モロッコ タンジール

.....

「未明行路」朗読①（モロッコ）

6月27日（晴れ）

アルジェリア大使館へついてきてくれた日本人青年と一緒に夕方バザールからの帰りに、ラクダの革で作ったモロッコ帽を買い、それから大きなスイカを買って彼と一緒に食べようと浜辺へ行った。海に沈む夕日を見ながら、二人でスイカを食べようと思ったのだ。空は雲がかかっている、太陽は見えなかった。海は相変わらず荒い。暮れる海に、金色に染まった雲の裂け目から海に噴射しているオレンジ色の光は、青い雲海を支えているかのようだった。誰もいない浜辺で二人ともスイカで腹いっぱいになり、食べ終わると次から次と思い出すに任せてなつかしい日本の歌を大声で張り上げるのだった。楽しくて、がっかりして、悔しかった素晴らしい一日の終わりだった。

.....

小岩：これ・・・がっかりして悔しかったといのは何があったんですか？

高橋：大使館に行ってビザを申請するのに所持金を出したり、早くしろとせつつかれながら書類を作って、やれやれと思ったら返された所持金が少なかった。そういうことがあってがっかりした。

小岩：最後の一行、楽しくて、がっかりして、悔しかった素晴らしい一日の終わりだったといのは素晴らしく盛りだくさんな1日だったんだなと思いました。

高橋：当時モロッコは空手ブームだった。「大山倍達、ゴットハンド」と盛んに声掛けられた。日本人と見るとみんな空手をやっていると思われていた。

小岩：そしてサハラ砂漠へ。砂漠はどんな感じでしたか？

高橋：砂漠のイメージがあったが土砂漠だった。お金も無くなって野宿する。バスの運転手も野宿している。そこでラジオの音が聞こえる。それはフランス語だった。日本は機械文明として進出して来ているけど、言語生活まで変わっていない。言葉が変わるだけのヨーロッパの支配、それは物凄いことなんじゃないかなと砂漠の中で思った。



サハラ砂漠の入り口

.....

「未明行路」朗読②モロッコ ザゴラ

7月3日 晴れ

インテリたちが悩みとする人生哲学や生きる意味などという様な難しい話はここでは無用に感じた。先進国の高度に文化の発達した複雑組織社会の人々が毎日悩んでいるような種類のもは、この人々からすればささいな事のように思われた。この土地で生きていくには必要のない事だった。私は人間のたくましい生命力に驚くばかりだった。長い衣をまとった女性は砂漠の方から村へゆっくりと歩いていく。町外れの低地に腰を掛けていた青年達はまだ話込んでいる。遠く村はずれの囲いの中にはラクダが三頭飼われていた。星が光り砂漠の村は闇の中にしだいに遠ざかって行った。

この村にはほとんど木が無かった。赤土の家の下には草が一本も無かった。機械文明の音がまったくしない村からは、子供たちの叫び声が村全体から聞こえてくる。この村には子供しか住んでいないかのようだ。砂漠の砂と小石の上に寝てみたものの、日中太

陽に熱せられた大地は蒸れるように熱かった。眠れなかった。子供たちの声が聞こえなくなると、不思議な事に村からはカエルの鳴き声が聞こえてくる。二匹のカエルの声が明瞭に聞こえる。こんなところでカエルの声を聞くとは思えない事だった。

.....

小岩：ここはすごい印象に残った部分で、いろんな悩みから解放される場所に行きたかったという感じあるんですか？

高橋：たまたま、サハラ砂漠の入口だけでも行ってみたいなど。

小岩：カエルが…本当にカエルなんですかね。木も草も生えない場所でのカエルの声が聞こえるのは夢を見ているようで不思議ですね。親夫さんの日記を読んでもその情景が浮かぶような文章が何度も出てくるので、そのまま素直に想像して頭の中で画像にしているんですけど、これも印象に残った文章でした。



オラン パレスティナのコマンドと共に

再びローマへ、そして東欧へ（ユーゴスラビア、ギリシャ、イスラエル）

.....

「未明行路」朗読③（ローマ）

7月15日 晴れ

バスを降りてユースホステルへ行く途中、頭髪は伸び放題で長く髭を伸ばし、青い顔をした疲れた表情の日本人青年と出会った。衣服はだいぶくたびれていて、ゴム草履を履いている。普通の旅行者達と違う事は一目瞭然だった。悪い病気にでも取りつかれている様にも見えた。声を掛けて話をしてみると、彼はアフリカ大陸を一周してきた男だった。しかも半年がかりでヒッチハイクをしてきたのだという。旅費は四百ドルかかっただけだという。私はこの話を聞いて恐れ入ってしまった。北アフリカを通ってきただけでも弱音を吐きそうになっていたのに、彼はなんと六か月もアフリカで過ごしてきたのだ。アフリカでヒッチハイクをするという事がどんなことか、私は考えただけでも滅入りそうだった。与える者と与えられる者の立場が逆転するアフリカで、現地の人たちの好意を期待し、車をつかまえてそれに便乗するという事は想像を絶する忍耐が必要だと思う。しかも通る車は少ないだろうし、たとえ拾われたとしても、どの様な人が拾ってくれるのかわからない。宿泊する場所のヒッチハイクとなれば移動する距離が不規則になるので危険な野宿が多かったと思われる。寝ていたら傍を象が通り過ぎて行ったとか、そばにサソリが這っていたという話をした。炎天下でほとんど通らない車をあてにして道端で立っている姿を考えただけでも弱気になってしまう。その上に、貧しく厳しい現実の生活者とお金の折衝をしなければならない事を思うと、私には想像できない厳しい旅であったに違いない。この問題を克服してアフリカ一周のヒッチハイクを成し遂げたこの男に賛辞を贈りたい。

しかしながら彼は日記を書いていなかった。その素晴らしい体験旅行を月日と共に忘却の彼方へ消滅させてしまうのはあまりにももったいないと思った。彼はもう二年ほど旅を続けている。その間に見たり聞いたり体験したことが数多くあっただろう。彼は自分の記憶にあると言っていたが、旅における日記は、良くものを見、良くものを考え、そして自分の考えをまとめる意味で不可欠のものだろう。彼の貴重な体験が失われてしまうのが惜しまれてならない。

非常に困難な旅を乗り越えてきた事と二年という長期旅行は、彼を非常に疲れさせているようだった。この様な旅行者特有の独特の匂いがあった。疲れと汚れと文化的なものに対するマヒという匂いだった。一方で彼のアフリカ旅行を讃えながらも、この様な旅行者にはなりたくないと思った。

.....

小岩：日記がどれだけ大切かということが親夫さんがそういう風に思っていることがしっかり書かれている。いろんな人に出会って、その人たちがどんな考えを持っていて、自分はそれに対してをどんな風感じたかという事をずっと書いてますよね。2年間アフリカを旅したこの青年は日記を残してないからほとんど残らない。

パレスチナのコマンドに会って、敵対しているイスラエルに行き、イスラエルの人と話を聞くという、実際にはすごく難解で、世界の中で結論が出せない問題をその時どんな風感じたか、どんな風に言っていたかというのを聞いていることがすごく重要なんだなと思いました。

それが残っていて、その頃どんな状況だったか私たちも読む事が出来ることが重要なんだなと。

私はテルアビブ空港銃乱射事件というのを当時子どもで聞いていましたけど、それがどういうものだったか後になるまで分からなかったんですが、改めて読ませて頂くとその当時の事が伝わって決めます。

解決しない問題はその後、アフガニスタンでもある訳ですが…。そうですね日記を書いていることはすごい事なんだなとここを読んでいて思いました。

小岩：ここからヨーロッパに戻ってイスラエル。イスラエルはやっぱり行きたい場所でしたか？

高橋：イスラエルは中東問題を両方から見たかった。両方から見ないと真実は分からない。行けないかもしれないけど入りました。



アテネ パルテノン神殿

小岩：小田実（まこと）の『何でも見てやろう』は親夫さんも読まれて行ったんだと思うんですが、読んだ記憶ではギリシャに訪れた時にあれだけの文明を誇った国や国民とは思えないと。

高橋：ギリシャはギリシャ正教なんですよ。ギリシャ神話に出て来る神々はどうしたんだろう。ゼウスとかあの神々はどこに行ってしまったんだろうと神殿の前に立って思った。



エーゲ海 誕生日の日に

.....

「未明行路」朗読④（ギリシャ）

7月24日 晴れ

エーゲ海に夕陽はおりようとしていた。紫の波影が岸に寄せている。夕陽は海面を削り、赤紫色の傷口を見せているようだ。この赤い海辺には日焼けした黒い児らが泳ぎ、岩間ではエビを捕っている少年たちがいる。私はアテネから最も近い小さな島を訪れた。エーゲ海に浮かぶ島々の遺跡巡りができないのなら、せめて一つだけでも島を訪れ、ギリシャの旅を楽しみたかった。

夕食をしていると前の席でイギリス人らしい家族が食卓に集まり、ハッピーバースデーを祝っている。私はこの楽しそうな家族を眺めながら、この偶然の出来事を楽しんだ。今日は私の二十五歳の誕生日なのだ。同じ日に生まれた者がこのエーゲ海の小島で巡り会うなんて、何とも愉快であった。誕生日おめでとう。

.....

小岩:ここは是非読んで頂きたかったところで、誕生日おめでとうで終わっているところも素敵ですよ。

この後イスラエルへ、210ドル分のトラベラーズチェックを紛失してしまう。

.....

「未明行路」朗読⑤（ギリシャ）

7月26日 晴れ

旅費を節約するために野宿をすることがあった。手ごろなホテルは満室で安宿を探してアテネの街をあちこちうろついて回った。疲れた体を休める所もなく、扉はすべて閉ざされ、野良犬の様にうろついていた。疲れた体を小突き回すように行き交う車や電車の音が私の心をいっそう苛立たせるのであった。四ヵ月ほど旅を続けていると物見遊山的楽しさは失われ、疲れが堆積してくる。今私は休息が必要なのだ。単なるホテルでの休息というのではない。心温まる優しさの伴ったくつろぎが必要なのだ。

旅というものは観光旅行なら三ヵ月が限度である。一ヵ所に腰を落ち着け、研究や仕事をやるなら長期間滞在でもいい。しかし次々と移動していくような旅は、それ以上の歳月が過ぎると新鮮度は失われ、興味は無くなり、しだいに苦痛になってくる。たいていのものは見飽きてしまい、多少違ったところで驚きもしなくなる。心が渴き、苛立ちと無感動に陥り、旅は惰性となってしまふような気がする。

これからの旅先で期待するのはインドだ。誰もが口をそろえて言う。インドへ行けば人生観も違ってこようと。

.....

アテネを飛び立ち、イスラエルのテルアビブの空港に着いたら、1ヵ月分の日記の入ったリュックが手元に届かなかった。



エルサレム城塞より

高橋：イスラエルでひとつ話したいことが。ツアーに参加してあちこち回りましたが、その時に女性のガイドさんに案内してもらった。終わりがけにテルアビブの近くの墓地に行って、見ると22~23歳の年齢が書いているものがずーっと並んでいる。途中で咲いていた花を1輪摘んで「I had boy friend」を言って、お墓にささげたという事があった。若い人たちが国をつくる為に戦った。

小岩：そのいっぽうでもう一つは国を奪われてしまうという。国際社会が二分していまだに解決しない場所ですよ。

中東へ（トルコ、シリア、レバノン、ヨルダン、イラク、イラン、アフガニスタン）



トルコ カップドキア



イラク バスラ

イラクでは子どもも、大人も皆写真を撮ってくれと声を掛けられる。

.....

「未明行路」朗読⑥（イラク）

8月23日 晴れ

旅において、かつて自分にはなかった人間への差別の様な感覚が身に着き始めている様な気がしてならない。旅の途中でのいろいろな出来事の体験が知らず知らずのうちにそうさせているのかもしれない。四カ月半ほどの旅がはっきりと私のものの見方や応じ方に変化を与えている。これは単なる皮膚の色での区別ではない。生活の貧しさへの軽蔑ではない。人の悪さからくる憎悪である。勿論善良な人々には国に別なく心を開くことができる。しかし一度その下心を知ると心は身構え、極度の不信感と軽蔑感に襲われる。しだいに旅の垢が自分の身に染みてきている事を自覚しなければならない。たくさんの人たちと出会い、話し、聞き、人の情けに触れ、誤解や不信感や悪意に傷つき、喜びや苦しみを味わいながらここまで旅を続けてきた。旅は自分を豊かに成長するものでなければならない。

.....

小岩：疲れてくるし、いろんなものを疑いはじめたりすると荒んでくるというのがあるんでしょうね。

この旅行記を読んでいると、ささいな親切に出会うと親夫さんの盛り上がり方を感じて、一方で悪意を感じることもあると、ドーンと落ち込むという心の起伏が手に取るように分かって面白いなと思って読ませて頂きました。

小岩：いよいよアフガニスタンに入って行きます。どうでしたか。

高橋：私にとってはもう一度行きたい所はアフガニスタン、特にヘラートです。

国境を朝手続きして、夕方まで街に行く手段が無いんです。暮れていき暗いなか2階建てまでしかない街に入っていくんです。星も物凄くきれいだった。通りが良く見えるペランダのある部屋のホテルに泊まった。カンテラを持って歩く人、飾り立てた馬の二輪の馬車。馬車にもランタンがついていて、走ると鈴の音が鳴る。寝ていると石畳に馬の蹄と鈴の音。「ああ、中世の音だな」と。すごくファンタジックだなと。



ヘラート ホテルの部屋から眺めたメインストリート

.....

「未明行路」朗読⑦（アフガニスタン）

9月3日 晴れ

この国では私はヨーロッパ人と同じ立場にいた。物質的に貧しく、物価の安い国では、私達は少ないお金で多くのことが出来た。その国の人たちにとっては、生活がかかっている商売上の駆け引きであり、私たちにとっては、それは一種の遊びのようなものだった。これと類似した事を単なる旅行者がやるのではなく武力でもって国をあげて強力に行われたのだとすれば、植民地主義や帝国主義というものが開発途上国にとっていかに恐ろしいものかが理解できる。

9月4日 晴れ

日本を出発してからとうとう五ヵ月経った。食事を終えて通りに出てみると、たくさんの拍手が聞こえる。何事かと行ってみると、一人の青年が交差点の中心で台の上に立ち、何やら周囲に集まった人々に向かって演説しているのだ。口ひげを生やした若い青年である。その周りにスカーフをつけた女性たちが集まっていて、これらに若い人たち

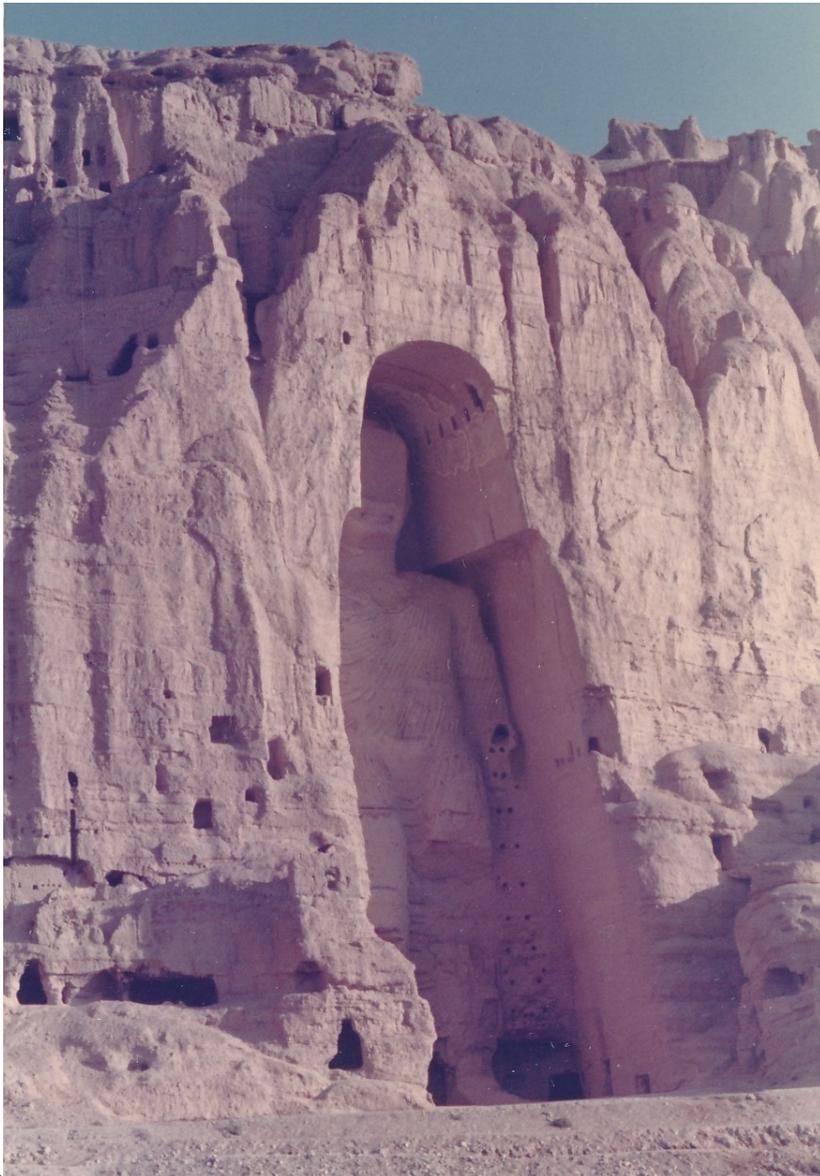
が通りから続々と加わった。二十歳前の人々が多い。もう交差点は人で埋まり、交通は完全にマヒしてしまった。私はここで私が求めていたものを見たと思った。新興国家の若い青年達の目覚めと、その国家建設への息吹である。ここではもはや老人は必要なかった。演説が一つ区切れるごとに周囲から拍手が起こった。誰も反対や質問をする者はいない。彼は盛んに毛沢東の事を話していた。彼がどの様な内容の話をしゃべっていたのかは現地語だったのでわからない。しかし民衆の反応はうかがえた。新しい社会を建設しようとする純粋な若者たちの姿であり、先駆者たちの姿だった。彼らを指導しているのは、アメリカやヨーロッパの国ではない。アジアの日本でもなかった。

.....



ヘラートのデモ

小岩：若い人たちが目覚めていく、今まさに始まろうとしたのを見た感じだったんですね。どこの国でもそうではないですよ。1972年、ちょうど親夫さんはアフガニスタンに行った時、のちのちソ連に対して抵抗運動するマスード（アフマド・シャー・マスード）が、後に英雄になるんですが、建築を学ぶ為に大学に入学した。マスードは物凄く本を読む人だったんですが、国が落ち着いたらまた学びたいと言っていたが、9.11の2日前に暗殺されてしまう。マスードも反共産主義なんだけど毛沢東の書いたものを物凄く読んでいたそうです。たまたまテレビを見ていたらマスードに似ている人が出ていて、マスードの息子だったんですよ。タリバンに対しての行動を起こす事を計画していると言われていたようなんですが、本当に同じ顔をしているんですよ。1972年はテルアビブもそうですし、日中国交回復もありますし、いろんな事がぎゅっとそこにあるなと思いました。



アフガニスタン バーミアン渓谷の仏像

小岩：これもタリバンに爆破されてしまったんですが、どれくらいの大きさですか？

高橋：分からないですが、仏像の背面に階段があって首あたりまで登りました。天井画が書いてありましてそれを見ました。

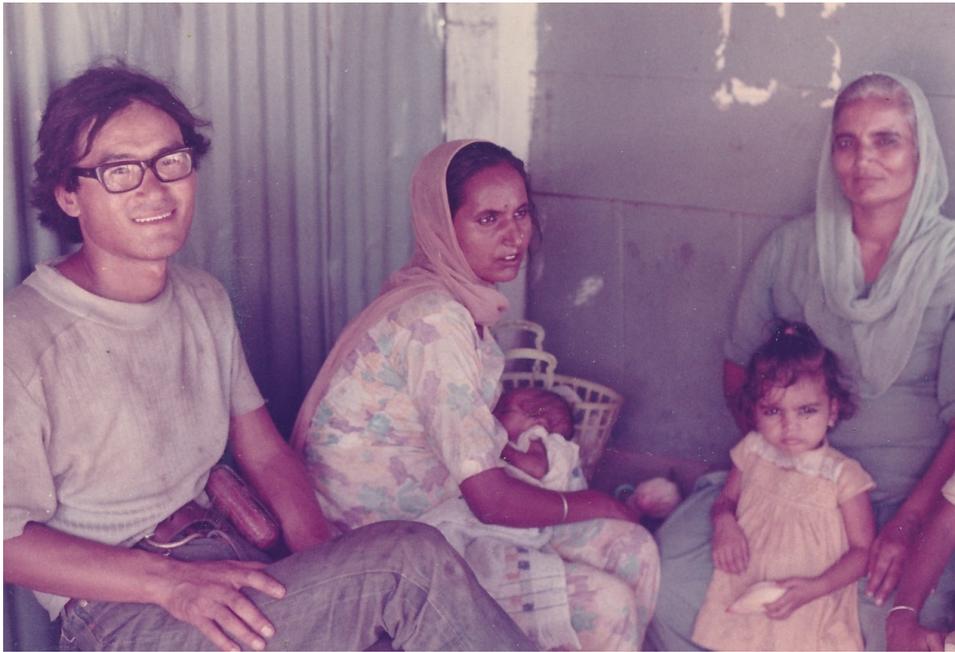
小岩：これを破壊しようとした時、世界中も日本も反対しました。でも何かで読んだんですが、バーミアンの石窟には色んな運動が起きたけど、アフガニスタンの子どもたちや貧しい人々たちには何の声もあがらなかった。遺跡だからかもしれませんが、そうか…と。

小岩：アフガニスタンに関わってくる大きな国たちがかき混ぜてしまう気がします。

高橋：難しいですね。

小岩：難しいなあって読んでいても思います。何度も日記にも難しいと書かれていますので本当にそう思いますね。

南アジアへ（パキスタン、インド、ネパール）



パキスタン インド国境のバス停

小岩：これはどう状況なんですか？

高橋：国境を抜けてバス停でやれやれと思ったところ。

高橋：当時の自分が写っているなと思います。

小岩：変わらないですね。同じメガネを掛けると変わらないなあと思いますね。



バスでカイバル峠を越える

小岩：これがバスの上。この写真はすごくいいなあ。結構な標高ですね。

高橋：そうですね。

小岩：ではインドに行きます。インドははじめにどこへ？

高橋：カシミールに。



アグラ 満月の夜のタージマハール

.....

「未明行路」朗読⑧（インド）

9月25日 晴れ

インドは以前書いたように金持ちと貧乏の格差が極端だった。アフガニスタンからパキスタンを経てインドに入った途端、機械の破壊したものや部品などが良く眼につき、機械文化が高い国である事を知った。中東を除き日本に次いでアジア第二の工業国と言われるだけのことはあると感じた。豊かな人々の姿を多数見かけるので、決してインドは貧しい国ではない。貧富の激しい国なのだ。これまで通過してきた国でさえ見なかった様々なものを見た。夜になると道路や駅には動物の様に人間が眠っていたし、市街の大通りで平気で排便をしている姿があった。パンツをはかない下半身裸の子供が珍しくない。乞食の数がとても多かった。しかし人々の乞食に対して施しを与える姿は少なかった。他の回教国では生活が貧しいとみられる人々でさえ、さらに貧しい人たちに施しを与えている場面をたびたび目撃し、私の心を打った。しかしインドではそうではない。

.....

小岩：格差というか、階級制というか、それを目の当たりにする。

とにかくインドだ、というように向かったと思うんですが、インドに入ってみてどうでしたか？

高橋：どうしても色んな事を考えてしまいますね。インドに行くと人生観が変わる。それもそうかもしれないな、と。日本でそれまで生きて来た基準が揺さぶられてしまう。貧しい人たちの群れの中に身を置いてしまうと、揺さぶられてしまう。非常にちょっとやばいな、という所が出て来ますね。

小岩：そこにゆだねてしまう人もいる。

高橋：もちろんいるという話もたくさん聞きますし。ただ私は旅人ですから、いつでもそこから立ち去る事が出来る。そこに暮らす人たちは逃げ出す事が出来ない。インドはさらに揺さぶられるところが多いところですね。

小岩：道に膨大な人が寝ている、とか、ありとあらゆる所に鍵が掛けてある。それは衝撃ですよ。

高橋：衝撃。あなたは善人ですか？と問われているような感じがしました。困っている人がいたら助けてやるのがいいって言っているけど、本当ですか？偽善者じゃないんですか？だんだん麻痺してくる。



インド バルナシ

.....

「未明行路」朗読⑨（インド）

10月3日

この聖なる川は黄色に濁り、増水時の水の様だった。この川の中で水牛のように頭を出しては泳いでいる男たちがいた。岸辺の泥を全身に塗りたくっている人々もいる。路地から又死体を担いで男たちがやってきた。まさしくバルナシイはヒンズー教の聖地である。

ここにはヒンズー教徒の遺体しか運ばれないのだろうか。死後の世界を信じて現世を生きてきた人間が今死に面している。果たして天国の神の元に行ったのだろうか。アンタッチブルと呼ばれる賤民の遺体はどう扱われるのだろうか。カースト制度は生まれながらにその人間を運命づける。インドの貧しい生活の人々を思い浮かべながら、遺体は苦しみの塊の様に見えてきた。あそこで焼かれているのは単なる人間の遺体ではなく、この世の苦しみが燃えているような気がした。

.....

小岩：遺体が焼かれていく所をご覧になるわけですけど。薪で燃やすのがまだいい方だと聞いてます。薪が払えない人はそのままガンジスに流すそうですが、この光景って衝撃…。

高橋：……。衝撃ですね。その灰を聖なるガンジスに流す訳ですよ。そこで沐浴なり何なりしているという。宗教って何だろうなあって。とにかく考えちゃいますよね。

小岩：人間が人間たるものは何なのか考えちゃいますよね。



カルカッタの市場

.....

「未明行路」朗読⑩（インド）

10月12日

最下層に属する人たちには宗教があるのだろうかと思つた。もしかするとアンタッチブル（不可触賤民）には宗教さえもないのではないかと思われるほど、精神的生活をするには過酷な状態だった。神にさえ見放されてしまっているとするなら、彼らの苦しみは絶望的で救いようがなかった。それに対して何もできない私は、路上に眠る、痩せこけた貧しい人たちの寝姿をどんどん通り過ぎながら、自分の知らない言葉だけの薄っぺらな自分の姿が、この様な人たちによって照らし出され、見せつけられるような思いを感じるのだった。

夕暮れ近くに通りを歩いていくと、ちょうど人々の食事時だった。彼らの食事は路上で行われていた。わずかな果物を十数人のほどの人数でつついていた。一人分の食料は当然かなり少なかった。家はもはや彼らにとっては縁のないもので、戸外が彼らの生活の場だった。

.....

高橋：何か出来る訳ではない。

その人混みの中で、薄っぺらな自分と対峙させられ、長時間経つと自分の軸だったものがぶれてくる。

小岩：それを味わいにインドへ向かう人もいる。

高橋：旅に疲れた体や心にインドは強い体験になった。

東南アジアへ（ビルマ、タイ、台北、上海）



シェエダゴン・パゴダ

.....

「未明行路」朗読⑩（ビルマ）

11月1日

旅はあと七日を残すのみである。旅の終わりに何が残るだろう。そして旅のはじめの思いとどれほど違っていただろう。しだいに新鮮味がなくなり、何事にも驚かなくなってしまった長旅の終わり。もう終わる必要があるのだ。終わらなければならない。終わったほうがいいのだ。

.....

長かった旅は終わりの時を迎える。

紛失した日記の入ったリュックサックは一足早く羽田空港に戻って来ていた。

親夫さんの相手の立場に立つ目線、記録しようと思って見る素直な目線は、現在も福島浪江の記録へと繋がっている。

その時々にもその場所で思った事が綴られた日記は、時が経ってもかつての自分と再会出来る。日記の魅力を改めて感じる事ができる。

高橋親夫さんの魅力的な文章の世界。

50年前に感じたさまざまな国の空気を2夜に渡り、その膨大な日記の文章を小岩勉さんに読み解いて頂きました。



文章：ほんだあい（喫茶 frame）